



リフレクション(省察)の習慣を身に着け、 アクティブに未来を進んで行く人間に

大学院医歯薬学研究所 医学域教授 **赤池 雅史** (あかいかまさし)

「鉄は熱いうちに打て (Strike while the iron is hot)」の頭文字をとって高石副学長が命名したSIH道場。道場と聞いて物々しい雰囲気想像していたのですが、学生同士会話が弾み、なかなか楽しげな様子。

医学科SIH道場は徳島大学の教育理念である進取の気風を体現できる人材の育成を目指し、4年前に始まったカリキュラムです。アクティブラーニング(学生が能動的に学ぶ学習方法)を取り入れたトータルで約15時間のプログラムで構成されていて、その一環として今年初めて導入されたのが、この日行われていた「リフレクション(省察)」のワークショップ。自身の体験を振り返り、次に活かすためにどうするか、自ら考え、行動する習慣を身につけるための授業です。

「最近の学生は暗記して正解を

言うことに慣れて、経験を振り返る機会がありません。そのため省察そのものをテーマにしたワークを入れて、リフレクションが何であるかを体験し、その経験を自分で咀嚼して解釈し、次の学習に活かせるよう、経験を垂れ流しさせないためのトレーニングをしてみらうのが目的です」と話す赤池先生。

イラストや文章を用いてこれまでを振り返り、その体験をグループで共有した後、将来、どうなりたいかという思いと共に自分への手紙としてまとめます。手紙は大学が保管し、1年後各自へ戻され、そこでまた今の自分を振り返るという体験に繋がります。

「例えば優れたスポーツ選手は振り返りの塊みたいなので、どこが出来てどこができなかったかを分析して次に活かしていると聞かれています。ハイパフォーマンス

であればあるほど、それが徹底している。常に自分を俯瞰して、言語化、可視化する習慣を身に着け、自らの資質を磨き、これからの時代を生き抜く力を養うきっかけにして欲しいと思います」。



このリフレクションのワークショップは、アメリカの心理学(認知脳科学系)大学院出身の山田先生からの提案で、ハーバード大学やスタンフォード大学で行われている内容を日本の学生向けにアレンジして実施されたそう。

「新しい試みなので、教員も学びながら進めていきます」という赤池先生。